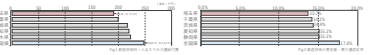
わたる拠り所

―地域と超高齢社会の架け橋として―

01. Site Informetion

埼玉県の現状

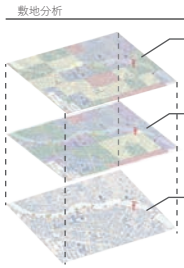
埼玉県は全国の中でも高齢化が一層進んでいるが、一人当たりの介護給付費や要支援・要介護の認定率が最も低く、支援・介護を必要としない元気な高齢者が多い。特に高齢化が進んでいる春日部市に着目した。



春日部市について

春日部駅北側には、旧日光街道や古利根川があり、宿場町として川と共に発展してきた。古利根川では、約 250m おきに橋が架かっており歩行者、自動車が行き交う場となっている。しかし、八幡橋から牛島人道橋までは約 1km と橋の間隔が開いており、川を気軽に渡れず、交通の便において南北で地域が分断していると言える。

敷地分析



凡例　65歳以上人口総数
- 0以上~34未満
- 34以上~73未満
- 73以上~125未満
- 125以上~169未満
- 169以上

古利根川を挟み南側は、65 歳以上の高齢者が多くいる。また、北側は若い世代が多い。

凡例　居住期間20年以上総数
- 0以上~58未満
- 58以上~119未満
- 119以上~181未満
- 181以上~272未満
- 272以上

古利根川を挟み北側は、比較的居住年数の短い住民が多く、南側は居住年数の長い住民が多い。

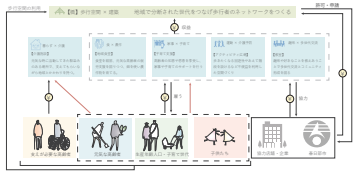
周辺環境図

居住年数や 65 歳以上の人口総数より、川を挟んで世代が分断している。川を中心に、畑や空き地といった豊かな緑が広がっている。季節を肌で感じられる都市と自然が寄り添う街。

02. Proposal

SDGs17 の達成目標を元に、春日部市における地域活動やコミュニティの分断の課題と、超高齢社会における介護の課題の同時解決を図る。地域資源である川を拠点とし、そこに橋を架けることで川辺の回遊性を持たせるだけでなく、地域の人達が気軽に集う居場所となりえる。高齢者が主役となり超高齢社会を支え、元気なうちから地域とつながりを持ち、その後介護が必要となっても快適に過ごすことが出来る建築・都市空間を構想した。

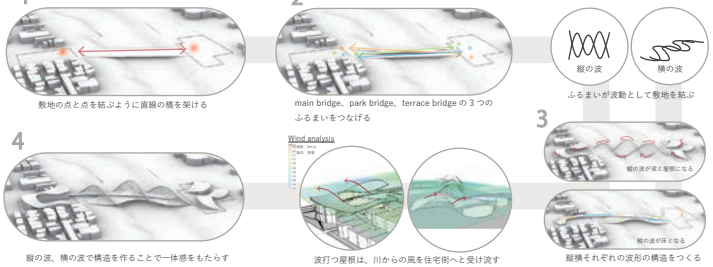
地域の課題　×　介護の課題



03. Design Concept

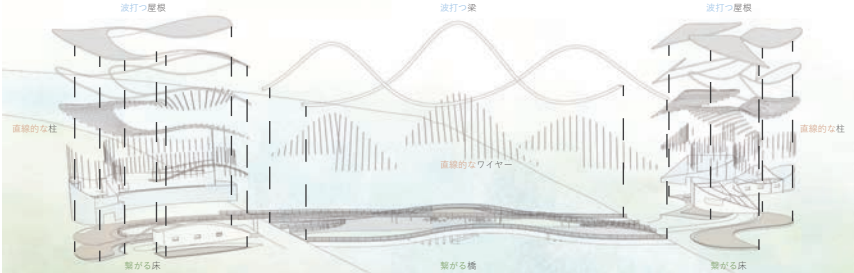
04. Design Approach

波のモチーフを利用した橋と建築の形態を操作し、繋がりを持たせた。

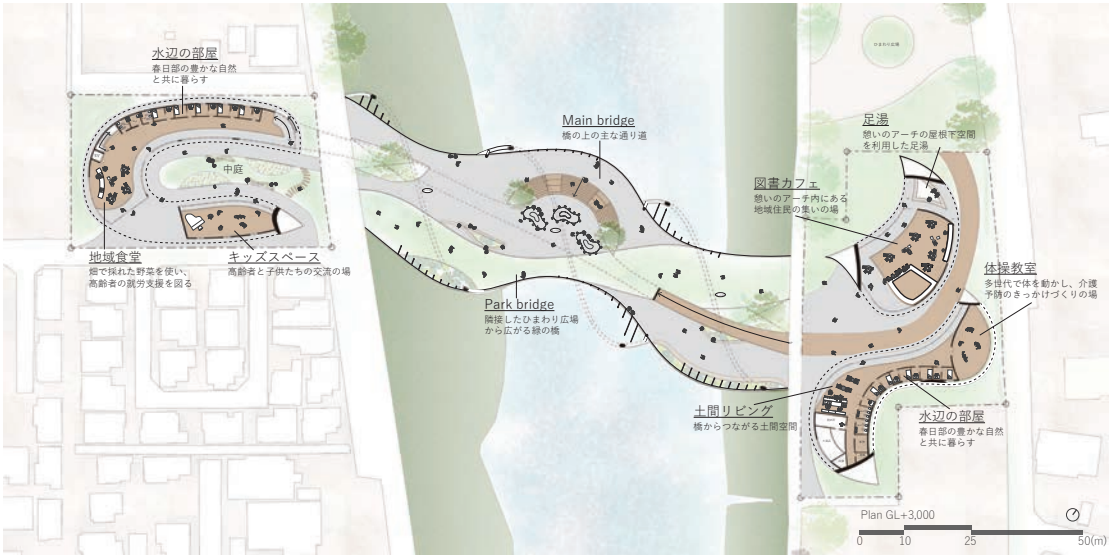


05. Structure Diagram

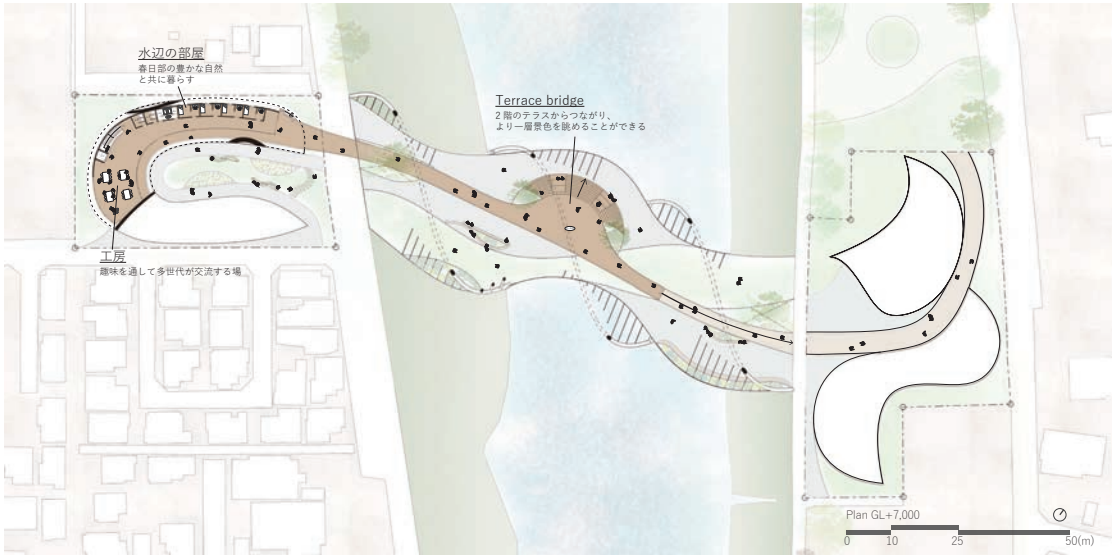
土木のスケールから建築のスケールへと構造形態をつなげる。



06. Plan GL+3,000



07. Plan GL+7,000



08. Parthpective

橋を渡ってふれあいのアーチへ行く。多世代が地域活動に触れる場。街の拠点となり、向こう岸へ送り出し向かい入れる役割を果たす。

工房を訪れる。ふれあいのアーチにある工房では、ものづくり体験を通して交流する。建築の屋根の流れが橋へ伝わる様子も見ることが出来る。

図書カフェに立ち寄る。橋を渡る前に現れる図書カフェは、地域住民の憩いの場となる。

地域食堂を訪れる。ふれあいのアーチにある地域食堂では、畑で採れた野菜を使った料理をふるまう。土間の入り口にすることで、利用者が入りやすくなる。

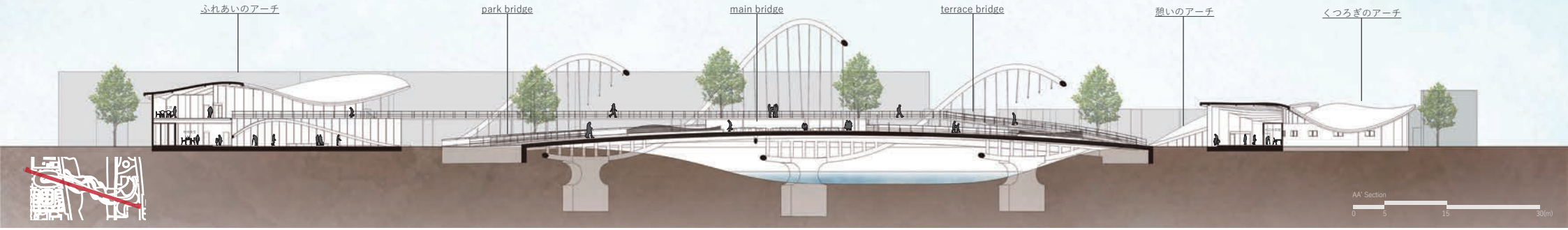
土間リビングで過ごす。地域住民のくつろぎの場となり、土間で靴を脱いですぐ上がることが出来る。

足湯に赴く。憩いのアーチでは、屋根の軒下を利用して足湯を設けた。川辺の景色を眺めながら過ごすことが出来る。

park bridge を渡る。隣接しているひまわりの広場と一体となった park bridge では、春日部の四季折々の自然を感じると共に、まるで橋の上に公園があるかのようなのびのびとした場になっている。

main bridge を渡る。main bridge は、橋を通行する人の主な通り道。ベンチに腰掛けたり、terrace bridge の床下空間を使ったテーブル席で休むことが出来る。

terrace bridge を眺める。terrace bridge は、ふれあいのアーチに繋がっており、2 階から直接橋を渡ることが出来る。古利根川の景色を一望しながら橋を渡る。



水辺の部屋を出た先のテラスから橋を眺める。テラスと terrace bridge が繋がることで橋へと興味を引き、行き来しやすくなる。中庭の様子も見ることが出来るため、賑わいを感じる。

憩いのアーチとくつろぎのアーチから橋を見る。橋の床が建築にまで広がり繋がることで一体感を生み出す。